

---

# 息抜きも

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

息抜きも

### 【Nコード】

N4200V

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

とても厳しい直美。その直美に対して軽いクラスメイト登志夫はどうしたのか。まんがライフMOMOで連載されていたピュアコンという漫画をヒントにして書かせてもらいました。

## 第一章

息抜きも

渡部直美はクラス委員である。女子なので男子の委員もいるがクラスの運営等は彼女が取り仕切っている。

いつも眼鏡をかけて黒髪を左右でお下げにしている。制服の着こなしも真面目で紺色のブレザーとスカートは常にアイロンまでされている。

目は程々の大きさで口は小さい。その顔立ちは整っている。目の光が強い。

その彼女がだ。クラスの男子達に言っていた。

「御掃除は真面目にしなさいね」

「やってるよ」

「ちゃんとな」

「してるつもりじゃ駄目なの」

こう厳しい顔で告げる彼女だった。

「自己満足では何もならないわ」

「厳しいなあ」

「そこまで言うのかよ」

「それでやれってか」

「そうよ。まずは御掃除からよ」

直美の言葉は厳しい。ここでもだ。

「綺麗なクラスにいないと心も乱れるわ」

「服装の乱れはってのかい？」

「クラスも」

「そうよ。だからしつかりとしなさい」

また言う直美だった。

「いいわね。チリ一つ残さないでね」

「うわ、そう来たか」

「本当に厳しいよな」  
「全く」

だが、だった。彼等は徹底的に掃除をさせられたのだった。彼女は厳しいクラス委員だった。そしてそれは掃除だけでなく、万事についてそうだった。しかも周りに対してだけではなかった。

部活ではだ。彼女は合唱部の部長だ。その練習もだ。

「もう一回ね」

「もう一回？」

「もう一回ですか？」

「そうよ、もう一回よ」

こうだ。部員達に告げるのだった。

「もう一回」

「ええと、休憩は？」

「休憩しないんですか？」

「もう皆疲れてますけれど」

「駄目よ。休憩なんて」

ここでも厳しい口調である。

「もっとね。完璧にできるまでよ」

「そんな、もうかなりできてるのに」

「そうですよ。凄くできてますよ」

「それでもですか？」

「まだ練習するんですか」

「完璧によ」

それでだというのである。

「完璧にできないと駄目よ。これ位じゃね」

「駄目なんですか」

「まだですか」

「それでなんですかね」

「そうよ。完全にできてからよ」

ぴしゃりとした言葉だった。

「わかったわね。それじゃあね」

「わかりました。それじゃあ」

「やります」

「もう一回」

部活でもこうだった。そして彼女自身も共に歌う。自分も同じことをするからだ。周囲もそのことは認めていた。それは学業にも出ていた。

「またか」

「一番だったってな」

「それも殆ど満点だろ？」

「やっぱり凄い奴だよな」

周囲は彼女の期末テストでの成績を見て言う。順位が壁に張り出されているのだ。

「毎日真面目に勉強してるからな」

「居眠りなんて全然しないしな」

「ああ、それもないな」

「絶対にな」

授業中も真面目に聞いてノートを取っているのである。

## 第二章

「しかし何かな」

「ああ、面白くなさそうな顔してるな」

「不服って感じでな」

「どうしてなんだ？」

周囲はだ。彼女を見て話す。本人も順位を見に来ているのだ。しかしその顔は不機嫌そう。見るからに面白くなさそうである。

そしてだ。一人が彼女に問うた。

「なあ。どうしてなんだ？」

「どうしてって？」

「あまり面白くなさそうだけれどな。どうしてなんだよ」

「全部満点じゃなかったから」

「それでだといおうのである。」

「だからよ」

「おい、全部満点を目指してたのかよ」

「そうよ」

はつきりとした声での返答だった。

「その通りよ」

「無茶言うな、また」

聞いた彼は驚いた声で述べた。

「全教科満点なんて」

「そつでない駄目よ」

また言う直美だった。

「完璧ではにと」

「完璧にかよ」

「何でもね」

こつ言って引かない。

「そつしないと駄目だから」

「うっん、厳しいなあ」

それはだ。周囲も思っただった。

「ここでも完璧主義なんだな」

「厳しいねえ」

「まさに自他共に厳しい」

「徹底してるよ」

ある意味で感嘆の言葉だった。しかしだ。周囲はこうも言っただった。

「けれど人間味ないな」

「ああ、ないな」

「全然ないな」

彼女のそうした完璧主義がそう評価されるのだった。

「機械みたいだよな」

「全くだよ」

人ではなくだ。それだというのだ。

そしてだ。彼女を昔から知る者がこんなことを言った。

「俺、小学校の頃からあいつと一緒にだけれどな」

「ああ、昔からか」

「あんなのか」

「そうなんだよ。昔からなんだよ」

まさにそうだというのだ。

「本当にな。杓子定規でな」

「子供の頃からか」

「ああなんだな」

「顔も髪型も全部同じでな」

そこまで一緒だというのである。

「ガリ勉で。糞真面目でな」

「口調もあんなのか」

「ずっとあんなのか」

「弟がいるんだよ、二人」

家族についての話も為される。

「双子の。今小学生だけれどな」

「どんなのだ？弟さん達は」

「あんな感じか？」

「やっぱり機械か？」

「いや、弟さん達は普通だよ」

彼等はだというのだ。普通だというのだ。

「けれどな。その教育がな」

「ああ、それ予想つくぜ」

「どうせあれだよ」

「滅茶苦茶厳しいんだろ」

「帝国海軍なんだよ」

それであった。厳格なこと鋼の如しと言われた。

「まさにな。それなんだよ」

「帝国海軍か」

「そこまでなんだな」

「そうなんだよ。もう挨拶の仕方とか歩き方まで細かいところまで

厳しくてな」

それを聞いてだ。皆溜息と共に言うのだった。

「弟さん達が気の毒だな」

「全くだよ。そんなのだって思ったけれどな」

「それでも。弟さん達可哀想だな」

それぞれだ。こう話す。直美はそのまま何も変わることもなく過こ

していく。まさに寸分の間もなく完璧なまま。そうした彼女だった。



### 第三章

その彼女がだ。常に何かと言う相手がいた。それは。

同じクラスの藤木登志夫である。茶色の髪を伸ばしいつも明るいというよりは能天気な笑顔を浮かべている。背は普通より高い。身体つきは均整が取れている。

その彼はだ。何かというと遅刻していた。それを言われるのだ。

「藤木君、今日もまた」

「ああ、悪い悪い」

反省していない返答だった。

「ちよつとな」

「ちよつと?」

「昨日うどん浴びてシャワー食ってたら十二時だったんだよ」

こんな言い訳をするのだった。

「部活から帰ったらさ」

「部活確かホッケー部」

「そうだよ。試合前でさ」

「そんなに遅くない筈ね」

直美はすぐに突っ込みを入れた。

「そうね」

「あれっ、そうだったかな」

「そうよ。言い訳は聞かないしね」

直美はこのことも釘を刺した。

「大体ね。一ヶ月のうちに何度遅刻してるのよ」

「さあ。どれ位かな」

「三回よ。三回遅刻してるのよ」

「何だ、それだけなんだ」

登志夫は能天気な調子で返した。

「もっと多いかって思ってたよ」

「三回も遅刻してるのよ」

ところがだった。直美はむっとした目で登志夫にこう返した。

「クラス委員が。何考えてるのよ」

「いいじゃないか、別に」

「いいって?」

「誰にも迷惑かけてないしさ」

登志夫の能天気な調子は変わらない。ある意味において見事である。

「だからさ」

「そんな問題じゃないでしょ」

その彼にさらに怒って言う直美だった。

「あのね、だからクラス委員として」

「ああ、それでさ」

直美の話を聞かずにだ。登志夫は逆に彼女に声をかけた。

「今日だけれど」

「今日。何よ」

「売店で何か特製のパンがあるんだって?」

「パン!？」

「それ何かな。渡部さん知ってる?」

「そんなの知る訳ないでしょ」

直美は牙を剥かんばかりになってだ。登志夫に言い返した。

「パンなんてね。私は食べないわよ」

「パン嫌い?」

「御昼は自分でいつも作ってるのよ」

むっとした顔になってこう答える。

「栄養を考えてね。カロリーもね」

「それで自分で作ってるんだ」

「そうよ。健康管理もちゃんとしないと駄目だからよ」

この辺りまで考えているのがだ。まさに直美であった。

「それでそうしてるのよ」

「そんなの気にしなくていいのに」

「気にしないでどうするのよ」

「美味しいって思うもの食べたらいいじゃない」

「それで健康壊したら何にもならないじゃない」

やはりこう言う直美だった。ここでも完璧主義だった。

「そうでしょ。違うの？」

「俺そんなの全然気にしないからさ」

登志夫は平気な顔で直美に返した。

「じゃあ俺で調べるよ」

「その売店のパンが何か？」

「そうするから。それじゃあね」

「ええ………ってちよっと」

登志夫に伝えてからだ。自分の言いたいことを思い出した。

それでだ。また彼にくっつかかった。

「まだ話は終わりじゃないわよ。いい？大体貴方は普段から」

「気にしない気にしない」

「ちよっとは気にしなさいよ」

こんな二人だった。とにかく登志夫は何処までもいい加減であった。まさに直美とは正反対だ。直美はそんな登志夫にいつも小言を言っていた。

## 第四章

それを全く気にしないで聞き流す登志夫を見てだ。周りは言うのだった。

「何ていうかなあ」

「あいつも凄いやな」

「ああ、全くだよ」

「どういう奴なんだよ」

ある意味において感嘆していた。

「あの渡部の言葉を無視できるなんてな」

「軽くあしらってな」

「そうできるなんてな」

「完璧主義の対極にある奴だしな」

「だからできるのか？」

こつも考えられるのだった。

「ああして聞き流すことが」

「かもな。まああいつの方がな」

「そつだよな。付き合いやすいよな」

「人間味あるしな」

「渡部さんはなあ」

また直美の話になる。

「意地悪でもないし気配りもしてくれるけれどな」

「それも何か違うんだよな」

「ああ、やっぱり機械なんだよな」

直美は性格は決して悪くはない。しかしそれもなのだった。

「だからなあ」

「一緒にいいにくいし」

「どうしようもないよな」

「何か話もしにくいし」

「それどころかな」

彼女の話といえはなのだ。それは。

「向こうから怒ってくるからな」

「もうガミガミとな」

「まさに生徒会長って感じで」

「困るんだよな」

何処までも人間味がなく付き合いにくい相手と思われていた。そして実際にそうだから余計に悪かった。そうしてそのうえでなのだった。

彼女自身も孤立、もつと言えば孤高であり続けていた。それについてどうも言わず何も思うところはなかった。しかし登志夫はなのだった。

ある日彼女にだ。こう声をかけたのだ。

「あのね、今度ね」

「今度。何よ」

「御祭り行かない？」

陽気な声でだ。こう提案してきたのだ。

「どう？今度の日曜日」

「御祭りって何の御祭り？」

「だから駅前の神社のさ」

そこだというのだ。

「御祭りだけれど」

「ああ、あれね」

「そう、あれに行かない」

登志夫だけ陽気な顔だ。直美はいつも通り如何にも敵しそうな顔だ。

「どうかな、それ」

「御祭りね」

直美はだ。彼の話を一瞬聞いた。そうしてこう言うのだった。  
「わかったわ」

「いいんだ」

「まだ返事していないわよ」

登志夫が勝手に了承したとしてだ。今の言葉にはすぐにクレームをつける。その速さも驚くべきものだった。やはり直美である。

「そうね。弟達を遊ばせるのにな」

「丁度いいわね」

「ええ。子供の教育には遊びも必要よ」

「だから渡部さんもね」

「私はいいわよ」

自分はだというのである。

「そんな。遊びなんて」

「けれど御祭りには行くよね」

「子供が遊ぶ時は監督する人間が必要でしょ」

「監督なんだ」

「そうよ。保護者よ」

まさに如何にもな言葉だった。

## 第五章

「だからよ。それでなのよ」

「じゃあそういうことにしておくね」

「そういうことじゃなくてね」

「その通りだっというんだね」

「そうよ。わかった？」

「わかったよ」

こう答えるがそれでもだ。顔が笑っている。思っではないといふことのだ。何よりの証であった。そしてそれを隠しもしていない。

「じゃあいいよね」

「今度の日曜ね」

「期待してるから」

また能天気な顔で言う登志夫だった。

「色々よね」

「色々って何よ」

「だから色々よね」

「私はただの監督よ」

こう言っ引かない直美だった。

「わかったわね」

「わかってるって。全部ね」

「わかってないじゃない、いつもいつも」

しかし登志夫は直美のそんな言葉を聞き流す。彼女の厳しい言葉を完全に聞き流している。そうしたやり取りをしたうえでだった。

その駅前の御祭りにだ。彼はわざわざ直美の家のところまで来てだ。彼女を案内するのだった。

家の玄関を出てだ。直美はまた眉を顰めさせる。そうして言うのだった。

「何でわざわざ来るのよ」

「駄目かな」

「待ち合わせすればいいじゃない」

「ナイトになったんだよ」

「ここでも能天気な笑顔で言う登志夫だった。

「御姫様を案内するね」

「御姫様ってね」

「だってほら」

登志夫は今の直美の格好を見て話す。見ればだ。

彼女は今は浴衣を着ている。濃紫で淡い赤の朝顔が描かれている。その浴衣に青い帯をしている。ただし髪型は同じである。

その彼女の浴衣姿を見てだ。登志夫はまた笑顔で話すのだった。

「着物だしさ、今」

「これは浴衣よ」

「浴衣だけれど着物じゃない」

「違うわよ、そこは」

「まあまあ。それでだけれど」

「それで？」

「弟さん達は？」

直美が大義名分に行っているその弟達について尋ねるのだった。

「何処にいるのかな」

「今呼ぶわ」

直美はこう言うのだった。玄関に顔を向けてだ。命令を出した。

「来なさい」

「りよ、了解」

「わかりました」

すぐにだ。お揃いの白い上着と青いズボンの二人が来た。髪型はおろか顔も同じだ。左右対称に動くそれは軍隊のそれを思わせる。

その二人を見てだ。登志夫は言うのだった。

「弟さん達？」

「そうよ」



その通りだと答える直美である。

「この子達がね。私の弟達よ」

「うん、凄いな」

「凄いつて何がよ」

「いやあ、よく訓練されてると思ってね」

彼はここでも明るい笑顔で述べた。

「軍隊みたいだね」

「規律正しくないと言世の中に出てから苦労するわ」

またしても正論だった。

「だからよ」

「その通りだね。それじゃあね」

「御祭りに行くのよね」

「うん。歩いて行く？」

直美の家から駅前その神社まではすぐだ。登志夫もそのことも考えてだ。それで彼女のこの家の玄関まで来たという訳なのだ。

## 第六章

「そうする？」

「歩いてこそよ」

これが直美のここでの返答だった。

「健康にいいのよ」

「健康を考えてなんだ」

「そうよ。それじゃあ行きましょう」

弟達に顔を向けての言葉だ。それを受けてだ。

彼等はだ。畏まった態度でこう答えるのだった。

「わかりました」

「今から行きます」

行進の様に動いてだ。直美の前に出た。そうしてそのうえで先に進むのであった。

それを見てだ。また言う登志夫だった。

「あのね」

「何？」

「弟さん達だけけれど」

御祭りが行われる神社の方向に向かいながらだ。直美に言うのだった。

「ちょっと任せてくれる？」

「ちょっととって？」

「考えがあるんだ」

軽い笑顔で彼女に話す。

「だからね」

「考えて何よ」

「悪いようにはしないから」

「こつも言うのだった。」

「だからね」

「あのね。その言葉はね」

直美はいつも通り厳しい顔になってた。登志夫に問うのだった。

「悪いようにするって時に言う言葉じゃない」

「あれっ、そうだったんだ」

「そうよ。何考えてるのよ」

「あの子達にお小遣いは？」

「あげてるわ」

それはだというのだった。

「お母さんがね。ちゃんとね」

「じゃあ何の問題もないや」

登志夫は直美の話の話を適度に受け流しながら述べた。

「それだったらね」

「だから何考えてるのよ」

「ここは僕に任せて」

また言う登志夫だった。

「本当に」

「だから何企んでるのよ」

「別に。企んでもいないよ」

「そう？」

眼鏡の奥の目を顰めさせてた。登志夫の顔を見る。そうして見るとだ。やはり何かを考えているようにしか見えないのだった。

それは主観によって見えるものだ。だが彼女は確信していた。

その確信によってた。登志夫に問うのだった。

「私の目を見てその言葉言える？」

「これでいいのかな」

登志夫はにこやかな笑顔のまま直美の顔を見てきた。その目を  
だ。

「はい、これでわかったよね」

「信じられないわね」

相手がそうしてきてもだ。直美はまだ信じていなかった。

「本当に。何を考えてるのよ」

「何をって」

「御祭りに行くのはわかってるけれど」

直美がわかつているのはそれだけだった。しかしそれでもだった。一行はその御祭りの場所に入った。神社の境内、その左右に木々が連なっている石の道にだ。その道を囲む様にして出店が連なっている。

トウモロコシもあればりんご飴もある。綿飴もだ。他にはお好み焼きにたこ焼き、たい焼き、祭りの出店はあらかた揃っている。

そこに来るとだ。登志夫は直美の弟達に笑顔で話した。二人はここでも行進の様に歩いていて彼に規律正しく顔を向けてきていた。

「君達はね」

「はい」

「何でしょうか」

「一つ条件を出すよ」

まずはこう彼等に告げた。

## 第七章

「いつも二人一緒にいること」

「一緒にですか」

「僕達二人で」

「それが条件だよ」

このことをだ。再び話したのだった。

「それはいいね」

「はい、わかりました」

「それじゃあ」

二人もだ。彼のその言葉に頷いた。

それを見届けてからだ。登志夫は再び二人に言った。

「後は自由だよ」

「自由!？」

「自由って」

「好きな場所に行って好きな場所で遊んで」

そうすればいいとだ。二人に笑顔で話すのだった。

「それで好きなものを食べたらいいよ」

「あの、いいんですか？」

「そんなことして」

「本当に」

「僕達二人でって」

彼等は登志夫の今の言葉に呆然としていた。そんなことを言われたのははじめてだったのである。直美の徹底した管理を受けていたからだ。

それでこう話してだった。あらためて登志夫に尋ねた。

「いいんですか？」

「あの、お姉ちゃんが」

おどおどしながら直美を見る。するとだ。

彼女はだ。眉を顰めさせていた。しかし弟達を見ているのではなくだ。登志夫を見てだ。彼に対して無言の圧力をかけていたのである。

だがそれは無視してだ。また彼等に話す登志夫だった。

「いいから。楽しんでおいでよ」

「いいんですか」

「本当に」

「僕達だけで」

「好きなことして」

「御祭りだよ」

だからだという登志夫だった。

「それじゃあいいじゃない」

「御祭りだからですか」

「それでなんですか」

「そうそう、だからね」

また話す彼だった。

「いいよね。それじゃあね」

「わかりました」

「好きなように遊んでいいんですね」

「そうして食べたら」

「いいんですね」

「いいよ。じゃあ行っておいで」

二人を急かす。そうしてであった。

一つだけ忠告した。それは。

「二人一緒なのはね」

「危ないからですか？」

「だからですか」

「何処にでも変な人間はいるからね」

「あんたみたいだね」

ここで直美の突込みが来た。

「変な人間は確かにいるからね」

「そうそう、僕みたいな紳士とは逆の変態がね」

「何処が紳士なのよ」

また突っ込みを入れる直美だった。顰めさせた顔でだ。

「あんたみたいないい加減な紳士なんていないわよ」

「そうかなあ」

「そうよ。それでだけれど」

直美は顔を顰めさせたまま再び登志夫に言った。

「この子達を二人だけでって」

「だから。御祭りだからよ」

「いいじゃない。御祭りなんだから」

「それでいいっていうの」

「いいのいいの。それじゃあね」

こんな話をしてだった。二人だけで行かせたのだった。二人はだ。満面の笑顔になってそのうえで何処かに行く。かつ飛んでという感じだ。

## 第八章

二人はすぐに取りとあらゆるものを買って食べていく。金魚すくいもやればヨーヨーも買う。お面は頭にある。完全に祭りの姿だ。

そんな二人を見てだ。直美はまた顔を顰めさせて登志夫に言った。

「何よ、あれ」

「御祭りを楽しんでいるんだよ」

「だから。あの無秩序さは何なのよ」

彼女が言うのはこのことだった。

「何だっというのよ」

「楽しんでるんじゃない」

登志夫はだ。にこやかに笑って答えるのだった。

「御祭りをね」

「楽しむってね」

「御祭りは楽しむものだよ」

まだこう言う彼だった。

「だからだよ。いいじゃない」

「いいって」

「それじゃあだけれど」

登志夫はここでも直美の話を聞き流してだ。そのうえで彼女に言った。

「僕達もね」

「えっ!？」

「だから僕達も楽しもう」

こう直美に話すのだった。

「いいよね、僕達もね」

「あの、楽しむって!？」

「だから。楽しもう」

登志夫の言葉は変わらない。見事なまでだ。



「いいよね。お祭りをね」

「御祭りをって」

「よし、話は決まりだね」

強引にそういうことにした。これまで通りだ。

「最初はお好み焼きかな」

「だから勝手に話を決めないでよ」

「お好み焼き嫌い？」

まだ言おうとする直美に問い返した。

「ひよっとして」

「嫌いな食べ物はないわ」

それはきつぱりと否定する直美だった。それはだというのだ。

「何でも残さずよく食べる。当然でしょ」

「じゃあいいよ」

また言う彼だった。そしてだ。

まずはお好み焼きだ。そしてたこ焼きにフランクフルト、焼き鳥にクレープにたい焼きにりんご飴とだ。食べ荒らすが如くだった。

そしてそのうえでだ。射的もした。まずは登志夫がするのだった。

照準を合わせてだ。狙った商品を討つ。だが。

一つも当たらない。全くだった。それをしてみてだ。

登志夫はだ。苦笑いと共にこんなことを言った。

「こういうのってね」

「苦手とか？」

「出店でやると全然駄目なんだよ」

そつだというのである。

「もうね」

「そうね。どうやら」

直美はだ。登志夫が今持っているその銃を見てだ。冷静な顔で言うのだった。

「その銃おかしいわ」

「おかしいって？」

「かなり古い銃ね」

その銃のあちこちに傷があるのを見ての言葉だった。

「年季があるわ」

「そうなんだ」

「そうよ。だから癖が強くなっているのよ」

「そうだといいなのである。」

「だからここはね」

「ここは？」

「考えて撃つべきよ」

「考えてって」

「狙いは心持ち右に」

こう登志夫に話す。

「いいわね。思っているより右を狙って撃つのよ」

「そうすればいいんだ」

「そうしたら当たるわ」

こうだ。登志夫に真面目な顔でアドバイスをするのであった。

## 第九章

「わかったわね」

「うん、それじゃあね」

登志夫は直美の言うまま心持ち右に的を撃つてみた。するとだつた。

当たった。見事にだ。

「よし、ゲットだね」

「あれ何なの？」

「何って。ベルトじゃない」

見ればだ。特撮のヒーローが変身する時に使うベルトだ。それであつた。登志夫はずっとそれを狙って射的を続けていたのである。

「それだけけど？」

「おもちゃを狙つてたの」

「コレクションしてるんだ」

にこやかに笑つてだ。直美に話した。

「あのシリーズのベルトね。集めてるんだ」

「子供みたいね」

直美は彼のその話を聞いてすぐにこう述べた。

「それって」

「いやいや、これがね」

「違つていうの？」

「ロマンなんだよ」

そのにこやかな顔での言葉であつた。

「これはロマンなんだよ」

「ロマンって？おもちゃを集めることが？」

「コレクションだよ。それを揃えることってね」

「それがロマンなの」

「男のロマンだよ」

まさにそれだというのである。

「それなんだけれどね」

「全然わからないわよ」

直美は眉を顰めさせてすぐに反論した。

「何でそんなのがロマンなのよ」

「あれっ、そういうのわからないかな」

「わからないわよ。何よロマンって」

「コレクションを揃えることがだよ」

「無駄じゃないの？」

「一見無駄に見えても」

違うと。そう主張するのだった。

「そうじゃないんだよ」

「無駄よ」

直美はその言葉をすぐに否定した。

「そんなことしてもよ」

「楽しいよ」

「楽しいって？」

「そうだよ。楽しいよ」

登志夫はまた直美に話した。

「そうして揃えていくのもね」

「所詮遊びじゃない」

これが直美の考えだった。コレクションを揃えることを遊びと言った。それで卑下していた。そのことを実際に言葉に出していた。

「そうじゃない、結局は」

「そうだよ。遊びだよ」

「遊びの何がいいのよ」

眉を顰めさせての言葉だった。

「何がいいのよ」

「何がって」

「そうよ。まずは勉強」

彼女らしい言葉だった。

「それにきちんとした生活を送る」

「規律正しくね」

「そうしないと駄目よ。しっかりしないと」

「いやいや、そこにね」

「そこに？」

「遊びを入れるんだよ。あえて」

登志夫はだ。柔らかい感じで話していく。その硬い直美にだ。

「それがいいんじゃない」

「あんたは遊びだけでしょ」

「そうかもね」

笑ってだ。彼もそれは否定しなかった。

「ひよっとしたらね」

「ひよっとしたらじゃなくて全部そうでしょ」

「だって。いつもきっちりしていてもね」

「していても？」

「息が詰まるじゃない」

こうだ。直美の怒っているような顔を見て話した。

## 第十章

「そうでしょ」

「息が？」

「そうよ。息が詰まるからね」

それで話すのだった。

「だからだよ。息が詰まるからね」

「遊んでるの」

「ほら、見てよ」

ここで登志夫の言葉が変わった。

そしてそのうえでだ。直美の弟達に顔を向けた。そのうえでまた話すのだった。

「あの子達ね」

「弟達？」

「凄く楽しそうじゃない」

微笑んでだ。そうして彼女に話すのだった。

「そうでしょ。楽しそうでしょ」

「遊んでるからなの」

「そうだよ。遊んでるからだよ」

それでだと話すのだった。

「ああして。息抜きになってるからね」

「楽しんでるの」

「そういうことだよ。それでね」

「それで？」

「僕達も今してるじゃない」

直美自身にだ。顔を向けての言葉だった。

「そうじゃない」

「今って」

「さあて。次は何をしようかな」

話は何時の間にか登志夫のペースになっていた。そのまま直美を乗せてだ。話を進めてきた。

「それじゃあね」

「何って」

「ヨーヨーでもすくう？それとも今度は何を食べようか」

「そうね。そこまで言うのなら」

微かにだがだ。直美の顔が和らいだ。そうして登志夫に答えてきた。

「ヨーヨーかしら」

「それだね」

「ええ、そちらに行きましょう」

こう登志夫に答えたのだった。

「それじゃあね」

「うん。それじゃあね」

「たまにはいいわ」

直美はその顔でまた言った。

「こういうこともね」

「うん、それじゃあね」

そんなことを話してだった。二人はだった。

今は祭りの中で遊んだ。それは直美にとってのはじめてのことだった。けれどそれでもだ。このうえなく落ち着き癒されることだった。

それでだ。祭りが終わって弟達と共に家に戻る時にだ。送っている登志夫に対してだ。こう言うのだった。

「ねえ」

「何かな」

「今日のことだけけれど」

登志夫に顔を向けての言葉だった。彼も彼女に顔を向けている。

「許してあげるわ」

「それはどうも」

「普段は許さないけれど」

顔を正面に戻して。今度はこう言った。

そしてだ。そのうえでだ。こつも言ったのだった。

「けれどね」

「うん。けれど？」

「これからもたまには許してあげる」

これが登志夫への今の言葉だった。

「たまにはね」

「そう、たまにはだね」

「だからたまによ」

そこは強調する。一応は。

「けれどたまにはいいから」

「うん、わかったよ」

このやり取りしてだった。登志夫は直美にあらためて話した。

「じゃあ今度はね」

「今度は？」

「また考えるよ」

笑つての言葉だった。

「その時にね」

「今考えてないの」

「だって。そういうのはしたい時にするものだからね」

「したい時って」

「それでいいから。だって息抜きはしたい時にするものだからね」

この言葉をだ。直美に話した。

「だからね。その時にね」

「いい加減ね」

「たまにだったらいいんだよね、いい加減も」

「まあね。それはね」

そんな話をしながら直美を送る登志夫だった。そんなことをして  
だった。直美を少しだけ柔らかくしたのだった。それがはじまりだ



つた。

息抜きも

完

2  
0  
1  
1  
・  
2  
・  
6

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4200v/>

---

息抜きも

2011年8月2日03時28分発行